

振り付け・演出、湯浅より、公演直前コメント、その6 マスク

公演も迫ってきました。

プログラム解説を書いたのは1週間前、その内容は公演前に公開した方が良いのでは？とのご意見があり、この直前コメントを急遽始めました。プログラム解説は、このコメント1回分くらいの文字数なので、ご心配なく！ お越しになる方々はご安心して、そちらもお楽しみにして下さいね。

字数制限のあるプログラム解説の中で、パーセルの劇作品の呼び方には少し工夫が必要でした。よく、「セミオペラ」と言われるのですが、この名称から即座に作品をイメージするのはなかなか難しいかもしれません。結局私は、そういう言葉を一切使わないでおきました。

イギリスでは、「マスク」と呼ばれる伝統の舞台があります。「え、あのマスク？」 いえいえ、昨今、皆さんに身近なのは、“Mask”、そしてこちらは“Masque”。

マスク（仮面）をつけて芝居や踊りをする事は古今東西に例が見られますね。イギリスでも、仮面を付けた登場人物が芝居や語りをして、歌やダンスが入って盛り上げ、衣装や舞台装置で豪華な演出をするエンターテインメントが16世紀に発展し、「マスク」と呼ばれました。17世紀の間も芝居で話を進めるマスクは人気の娯楽でした。イギリスでは、オペラのように登場人物が歌って状況説明や心情吐露をする事は好まれなかったようです。

パーセルの劇作品はこういうイギリスの伝統が発展したものと言えるでしょう。マスクと呼ぶには大規模なので、セミ・オペラというような呼び方がされるのかもしれませんが。でも、私はやはり、イタリアの「オペラ」よりイギリスの「マスク」の香りを感じますよ。イギリスでは今でも「マスク」を踏襲した出し物のごく普通に行われ、彼らにとっていかに身近な楽しみなのかと思います。私もかつて、歴史劇シリーズにダンサーとして出演していましたが、今思えばあれは「マスク」でした。枠や名称にこだわるのは好みではない、というのもイギリスらしくて、誰も「マスク」とは言っていませんでした。どこからか衣装や装置を持ってきて、折あれば演劇しようとする人がいるのも、ちょっと茶目っ気ある彼らの演劇好き、シェイクスピアの名を出すまでもなく、芝居が身近にあり続けた事の証でしょう。

本公演でも、役者が演ずる語りで皆様を引き込み、音楽とダンスと衣装で存分におもてなしする所存ですよ。芝居と音楽とダンス、彼らが親しみ続けた舞台を想像しつつ、どうぞお楽しみくださいませ。